慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	資本の実体に就て（一）
Sub Title	
Author	堀切, 善兵衛
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.8 (1914. 10) ,p.951(41)- 962(52)
JaLC DOI	10.14991/001.19141000-0041
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19141000-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の昨今の勝利に徴しても、殆ど疑を容れざる所である。（九月十三日稿）

資本の實體に就て（一）

堀切善兵衛

一

學術上に於て資本と稱する所のものと、通俗に資本として了解するものとの間に大なる相異の存することは少しく經濟學の素養ある者の容易に感得する所なり。然るに今日世間の經濟論を試むる人々の多くは何等經濟學上の素養なく、唯銀行會社等の實業に從事し居りて多少世俗の間に信用せらるゝより往々臆說獨斷を逞ふするものあり、又世間の新聞雜誌記者の如きは極めて貧弱なる經濟學上の智識を以て漫りに我見を主張して、何等の研究的態度と新進の智識とを具有すること無きが爲め其論議する所却て健實なる國民經濟の發達を呪詛し人々を疑惑の渦中に陷れつゝあるもの少なからず。例へば外資輸入の可否を論ずる際の如き

も苟くも論著にして徹透したる經濟學上の智識を以て資本の何物たるやを明かにし、單に之を通貨の借入れと見做すが如き僻見を免るゝに於ては問題は及を迎へずして自ら解決する所ある可きのみ、然るに問題其物を正解するとこなくして直ちに其結果をのみ論斷せんと欲す、是れ世間の議論徒らに多くして然も其正鵠を得たるもの極めて少なき所以たらずむば非らず。先づ以て資本の何物たるやを明確にするに非らざれば之を輸入するの可否を論ず可きに非らざるなり、されば以下少しく卑見を述べて此問題を研究せんとする人々の參考に供せんと欲するものなり。

資本即ちキャピタルは羅典語のCapitaleより出で貸金の意味たりしなり、故に今日に於ても世俗に於て資本と云ひば直ちに資金を了解するは決して無理ならぬ次第なりとは雖も然も今日經濟學上に於て資本と云ふは斯の如く單純なるものに非らず、否斯の如く單純なるを得ざる正當の理由ありて存す、今試みにPositive Theorie des Kapitalsの著者として有名なるベムバウエク氏の定義を擧れば左の如し。

Capital in general we shall call a group of products which serve as means to the acquisition of goods. Under this general conception we shall put that of social Capital as narrower conception. Social Capital we shall call a group of products, which serve as means to the socio-economical acquisition of goods; or, as this acquisition is only possible through production, we shall call it a group of products destined to serne towards further production; or, briefly, a group of intermediate products. Synonymous with the wider of the two conceptions, the term aquisitive Capital may be very suitably used, or, less suitably but more in accordance with usage, the term Private Capital. Social Capital again, the narrower of the two conceptions, may be well and concisely called productive Capital.

而してベムバウエルクは其所謂社會的資本の中には左の數種を含む事を指示したり

(1) Productive improvements, arrangements and dispositions of land, so far as these preserve an independent character, such as dams, drains, fences etc. So far, however, as they are completely incorprated with the land, they are to be kept separate from Capital for the same reasons which made us keep land itself separate from Capital.

(2) Productive buildings of all sorts, workshops, factories, sheds, steadings, shops, streets, railways, and so on. Dwelling houses, however, and other kinds of buildings, such as serve immediately for any purpose of enjoyment or education or culture, e. g. theatres,schools, churches, law courts, do not come under Capital.

(3) Tools, machines and other kinds of productive utensils.

(4) Useful animals and beasts of burden employed in production.

(5) The raw and auxiliary materials of production.

(6) Finished consumption goods in the hands of producers and merchants as (warehouse) stock.

(7) Money.

次に其所謂個人的資本は次のものより成ると稱したり

(1) All goods which form social Capital.

(2) Those consumption goods which their owners do not use for themselves, but employ by exchange (sale, hire, loan) in their acquistion of other goods, e. g. let-houses, lending libraries, means of subsistance advanced by undertakers to their labourers, and many others.

吾人はマムバウエルクが經濟學者の多くと其見解を異にして勞働者が生產に從事しつゝ在る間彼等を養ふに必要なる生活資料をば社會的資本中に包含せしめざりし點に關しては異論なき能はずと雖も然も大體に於て彼が資本に定義を下して「財貨の取得に用ひらるゝ生產物の集積なり」と稱したるもの、又資本を再分して社會的資本と個人的資本とに區別したるは其當を得たるものと認めざるを得ざるなり

二

資本は過去の生產の結果にして更らに財貨の取得に用ひらる可きものなりとは經濟學者の意見概ね一致する所なれども然も事茲に至るまでには幾多の議論と研究とを經過したるは勿論にして最初世人は資本を以て資金の意味に解釋したること前述せる所の如し。然るに中古基督敎の勢力盛なると共に金錢の子を產むものに非らざること主張せられ、從て利子の收受も亦非難せられたりしが此論に反對する者亦一方より現はれて、互に論難討究しつゝある其間に金錢が利子を生ずる力は金錢其物の力に依らず。其金錢を以て購入したる或貨物の力なること

を發見し、金錢の裏面に存する此物こそは眞の資本にして金錢は唯其代表物たるに過ぎざること漸く人々に依りて承認せらるに至りたり、而して此事實を鮮明するに於て最も力を致したるは彼のヒューム、チューゴー等なりしこと世人の熟知する所の如し、爾來資本の意味は一躍擴充せられて頗る廣義に解釋せらるゝの常なりき。

然るにアダム・スミスの出づるに及んで彼は總ての貨物は必ずしも子を產むものに非らざること、換言すれば新たなる收得を產出するものに非らざることを主張したり。即ち或財貨は直接の消費に供せらる可く、其然らざる財產のみが所有者に對し所得を與ふるあるのみ、故に此終りのものゝみを資本と解せざる可らずと稱したり。然れども彼は個人に取りて收入の原因たるものは必ずしも國家に取りて生產の原因たらざることを認むると同時に一國家若くは一社會の富の增殖を主眼とする經濟學上に於ては將來社會の生產額を增加するが如き用途に使用せられたる財貨をのみ眞の資本と稱せざる可らずと論斷したり。其後經濟學者の多くも亦是れと同一見解を持したりしが、然もこは生產論に於ては極めて便宜とする所なりしも、一度分配論に移り來るや生產には直接關係なけれども個人收入の一原因を構成する資本の茲に存在することは如何にしても之を觀過するを得ず爲めに多大の困難に遭遇したり。例へば貸別莊若くは享樂用の馬車自働車の如き何等生產に關係なしと雖も此等の物資を所有する私人、會社等は他人に之を貸與して相當の收益を得能ふことは疑の餘地なき所なり、されば資本を以て單に將來の生產の爲めに使用する財貨なりと狹義に解釋するに於ては個人が營利の手段に供する其財貨をば悉く資本中より除去せざる可らず。已に一度資本より之を除外すとせんか之れより生ずる收入は全然不當利得と認めて社會主義者の主張するが如く國家に於て之を沒收するの可なるを見るの結果となる可し、故に思茲に至れば私人が營利の爲めに使用する貨物も亦之を除去する能はずして爲めに學者頗る其取捨に困却せるの觀有りしは爭ふ可らず。

されば近世の經濟學者は中途に於て一度狹められたる資本の意義を再び擴充して之を廣義に解釋せんとするもの極めて多し、即ち社會的に生產の用途に用ひらるゝものは勿論縱令直接生產に使用せられざるも苟くも資本價値を有して其

用途に從ひ所有者に收入を與ふるものをも尙包含せしむるもの多し、例へば Herman は「交換價値を有する効用の實體なり」と稱し Jevons は勞働者の生活資料なりと解し、Walras は一時に消費せられざる永續的貨物の全部なりと解釋し Knies は將來の需要滿足に充當せらる可き經濟主體の所有する財貨にして其消費貨物たるや營利貨物たるや生産貨物たるやは敢て問ふ所に非ず」と稱し Fisher は「現存せる貨物の總額なり」と解し Clark 及 Seligman 等亦之と略ぼ同樣の見解を有するが如し。

資本の意味を單に社會若くは國家の生産に直接關係したる貨物と局限せずして之を廣義に解するは極めて良し。然れども余はクニイス若くは米國近代の學者の如くに之を現存する貨物若くは富の總額と同一視するの可なるや否やに付きては疑なき能はざるものあり、何となれば總ての財貨若くは富の中には生産にも將た收益にも使用せられずして唯々直接消費の目的物たるものも少なからざる以上は此兩者を區別するが爲めに資本なる名稱を保存するは獨り經濟學研究上に於て便宜なるのみならず、實際上に於ても資本なる名稱は古來因襲の久しき其言葉の中には將來に對する豫見。過去及現在に於ける節約等の意味が包含せられて一種の道德的觀念を人々の念頭に湧起せしむるの力あるが故之れを全くの不必要物として經濟學上のテクニック中より除外し去るは甚だ不利益なるを感ずればなり、且つは同じく富なりと雖も之を社會的資本として活用すると營利的資本として使用すると將た單に消費の目的物たらしむるとは一國將來の富の蓄積と經濟の發達との上に非常なる相異を來すに至る可きは疑を容れざる所にして。例へば生産に使用せられたる財貨は之に由りて直ちに社會の財貨を增加す可く其增加したる財貨は又々新たなる財貨を生ず可きが故國富は所謂 Cumulative に增加するを得可し、然るに生産に關係なき營利事業に投せられたる場合には其財貨は直接に國富を增加せず、單に之れより得たる收益を所有者が將來生産的に使用するに依りて初めて國富の增加を見るに至る可く前者に比すれば國富の增加する割合は極めて遲緩なりと云はざるを得ず。更らに財貨が直接消費の目的物として使用せらるゝ場合には國富の增加は毫末も之に伴はざるなり（但し生産に從事しつゝある者の生活資料の如きは直接に消費し盡さるゝと雖も然もこは生産に必要缺く可らざる所のものなるが故國富の增加に大に關係あるものと解せざる

可らず、ベンバウエルクが Means of Subsistance advanced by undertakers to their labourers を以て個人的資本の中に數へたる所以なりと雖も。然も吾人は寧ろ之を社會的資本の中に包含せしむるを至當と感ずるものなり、蓋し社會的資本と個人的資本との區別を生產に投せられたると營利に用へられたるとに依りて定むる以上は勞働者に支給せらるゝ生活資料の如き明かに社會的資本中に算入す可きものなればなり。）

勿論現存する財貨の凡ては資本と成り得るものたるや明白なり、然れども之を資本と爲すや否やは所有者の意思に依て定まるものなり、例へば大學生の總ては卒業生たり得るものに相異なきも果して卒業生となるや否やは學生の意思と境遇とに依りて定まるが如し。故に財貨の全部は資本なりと云ふは聊か早計の嫌なき能はず、殊に經世家の立場より云へば務めて世人をして其所有する財貨を資本として之を使用せしむることに努力するの必要あり。而して資本として使用せしめんが爲めには世人をして現在の享樂を犧牲にして將來を慮るの風習を盛ならしめざる可らず、又零細の財貨を以ては今日の經濟社會に殆んど何等の用を爲すに足らざれども然も廣く之を集積するに於ては極めて有力なる働きを爲し得るものたることを知らしむるの必要あり。彼の郵便貯金の如き零細の資金を集めたるものに外ならずと雖も然も全國を通じて巨億の金額に達するに於ては或は鐵道資金として或は低利資金として我國の財政經濟上に頗る有力なる働きを爲しつゝあるに非ずや。左れば同じく財貨なりと雖も之を用ゆる人の如何に依りて或は資本となり或は資本とならざるなり。富豪が遊樂の爲めに使用する車馬は資本たるを得ずと雖も馬車會社に取りては資本たるが如し。又同じく富豪と雖も單に之を遊樂の爲めに使用せずして其關係したる多數會社の事務を取る爲めに必要なるが爲め之を使用しつゝある場合には彼に取りても資本たり得可し。故に財貨は其用ゆる人に依りてのみならず。縱令同一人が之を用ひても其用途に依りて資本たることあり、又資本たらざることあり。更らに分量の如何に依りては到底資本として其の用を爲すに足らざるものと雖も多數之を集積するに於ては立派なる一國若くは一個人の資本ともなり得可きものなることを知らざる可からず。

要するに資本の範圍は極めて彈力性の多きものと、解釋せざるを得ず、餘りに廣

く之を解するは却て益なきと同時に餘りに。之を狹く解するも亦障げなきに非らず、而して。此彈力性の存する事實こそ經濟學者及經世家の特に注意す可き所にして。國富の增加を計り經濟の發展を期する上より云へば務めて此彈力を利用して資本たる財貨の充實を計らざる可らず。蓋し近世の經濟組織に於ては資本利用の範圍は殆んど其窮極する所を知らざるの有樣なればなり（未完）

歐洲開戰前後の倫敦金融市場

堀江歸一

一　開戰前後の金融市場日誌

七月二十三日　墺地利はセルヴヰアに覺書を送り、四十八時間以內の回答を求む。

七月二十四日　墺國の通牒は露國內閣會議の議題に付せらる。英國駐在獨逸大使は英國外務省に覺書を送り、墺國の態度を辯明し併せて獨逸政府が當該事件を係爭國間の問題に局限するの希望を有することを聲明す。

七月二十五日　セルヴヰアは墺地利の覺書に答へ、墺國政府が此回答に滿足せざるときには、事件を仲裁に付するの意嚮あることを以てす。墺地利はセルヴヰアの回答に滿足せず、直にベルグラードに於ける墺國公使の退去を行ふ。

七月二十六日　英國海軍省は第一艦隊の兵員を補充す。